震災の全物故者追悼

門主親修で一周忌

千人が本山法要に参列

本願寺派

戦後最悪の大惨事となった兵庫県南部地震からちょうど一周年となる十七日、浄土真宗本願寺派（松村了昌総長）では、京都市下京区の本山本願寺の阿弥陀堂で、「阪神・淡路大震災物故者一周忌追悼法要」を厳修。大谷光真門主の親修で阿弥陀経作法により厳修されたこの追悼法要には門信徒、僧侶、宗務員ら約千人が参拝、六千三百八人の震災の犠牲者を追悼した。

追悼法要は、午前十時半から阿弥陀堂において営まれ、松村了昌総長をはじめ伊井智昭、桑原範雄、松本隆照（僧綱）、出口湛龍の各総務をはじめ北條成之宗会議長、信楽峻磨監正局長ら三権の代表者ら宗門要職者ら多数も参列。

法要は、大谷光真門主の親修で阿弥陀経作法により営まれ、堂内に読経が流れる中を松村総長、北條議長、信楽局長らが代表で焼香を行なった後、約一千人の参拝者らも次々と焼香に立ち、震災の犠牲者を追悼した。

法要後、松村総長は挨拶に立ち「遺族の方々の心中を察しますと言葉もありませんが、念仏の中にこそ真実があるのであり、そういう思いでこれからの人生を生かさせて頂くことが大切だと思います」と述べた。

また、中西智海中央仏教学院長は法話を行ない、「今日の法要が、一寸先のことさえ分からない我々凡夫が、最も確かなご本願に導かれて御同朋・御同行として共に歩ませて頂く機縁となることを念じます」等と説いた。

約一千人の門侶らが参拝した震災一周忌法要【写真は省略】

『220人の証言』完成

兵庫県南部地震の体験綴る

一周忌法要で配布

兵庫県南部地震の被災体験を生々しく綴った『街がかわった 心がかわった－阪神大震災二二〇人の証言』が震災一周忌一七日に完成した=写真【写真は省略】。“仮設住宅に花いっぱい運動”を展開する臨済宗妙心寺派の宮下玄覚地蔵院住職らが中心となってまとめたもので、震災が何を奪い、何をもたらしたか、－本書は二百二十人の肉声を通じて読者に強く訴えかけてくる。

宮下住職はボランティア組織Memorial95117の代表を務めており、本書もその活動の一環。「老若男女、いや犬も猫もこの震災を体験したのだから亡くなられた方々のためにも後世に（体験を）書き留める義務があるのでは」（「はじめに」）という思いから、自然と企画が生まれ、取材、編集も全て学生などボランティアの手で進められた。

寄稿したり取材を受けた人達は年齢も職業もさまざま。一編一編は短い、そこに盛られた体験の重みには圧倒される。

制作は震災一年目の十七日に間に合い、神戸市長田区の時宗真光寺で営まれた全日仏青・神戸市仏運の一周忌法要参列者に配布された。

B六判五二八ページ、頒価一、五〇〇円（送料別）。売り上げは義援金やボランティア活動基金に充てることになっている。